しい、ラディカルなことを言ってたやつが、たちまちわたしなんかをとび越して右がかったことを言い出し、やがて御稜威とか聖戦とかを口ばしるようになる。むしろ、いままでなまぬるいリベラルだと思っていた人のなかに、反動期になればなるほどシャンとしてくるという人がいる。むろんリベラルにもダラシないのが多かったけれど、とにかく平素口で言っている思想だけではわからないものだという感じを痛切に味わった（「普遍的原理の立場」『座談』⑦）。

「滝川事件以後、大学の頽落論がやかましかった」のも二年生のときのことであった。自由主義をテーマにした講演会もさかんに行われたという。折から「頽落自由主義の検討」（『中央公論』一九三五年五月）などが世に問われていた。そのようななかにあって、尾崎咢堂（行雄）の「復古主義批判」講演は「痛快をきわめ」るものであった。なかでも尾崎が、「われわれの私有財産は、天皇陛下といえども、法律によらずしては一指も触れさせたもうことはできない」と述べたことが「電撃のごとくぼくを襲った」と丸山はいう。日本の左翼も私有財産攻撃をしているなかで、「いかなる権力も侵すべからざる権利としての私有財産」をいうのはヨーロッパ的であり、「咢堂というのは本当の自由主義者、数少ない自由主義者だと思いました」と記す（『回顧談』（上）一七五～一七八）。

ただし後年、松沢弘陽の質問に答えて、この件では「そんなに学問的反省をしたわけではな」く、「学問的に反省させられたのは南原〔繁〕先生です」と述べている。南原の拠って立つ新カント派には「非歴史的なものの持っている強み」、すなわち「非常にはっきり、時代のほうが間違っているのだ、時代は間違った方向に歩みつつあるということを、当たり前のこととして言える」のであり、「圧倒

的に、時代がある方向に向いていますと、歴史主義だと、これが歴史の動向なんだという主張にかなわない」。南原を通してうけたのは、「歴史主義に対する反省」だったという（『回顧談』（上）二〇九～二一〇）。南原は、丸山のヘーゲルへの傾倒ぶりをみて、ドイツではヘーゲリアンがほとんどナチスの陣営に行き、抵抗しているのはカント派であるとして忠告しており（「思想史の方法を模索して」『集』⑩）、丸山は、それが南原から「私のいちばん学んだ点の一つ」だとも述べている（「一哲学徒の苦難の道」『座談』⑤）。マンハイムこそはイギリスに亡命という手段をとったが、丸山は、「眼前にする日本の知的光景においても、知識社会学者からマルクス主義者にいたるまで、その知的転向は、おおむね「階級」を「民族」に置きかえることによって、歴史的存在による意識の拘束性という同じ命題を掲げながら進行していたのです」という（「思想史の方法を模索して」『集』⑩）。

一九三六年、二・二六事件が起こったのも二年生の終わりであった。すでにNHK（社団法人日本放送協会）に勤めていた兄から午前中に第一報が入り「本郷にすっ飛んで行った」が、「何がどうなるかわからないという感じ」で「大変な日」であった。いかなるファシズムも初期においては急進的で反資本主義的なことをいうと考えていた丸山は、その夜、この事件は「根本的には進歩的だよ」という兄と「大激論」を交わしたという。折から、その直前二月二一日には、美濃部達吉が右翼に狙撃されるという事件もあった（『回顧談』（上）一七九～一八一）。加えて「法・経両学部には、軍部や右翼に、前からにらまれていた教授が少なからずいたので、決起した軍隊が、東大にも押しかけてくるというううわさがあって、学内は無気味な緊張につつまれてました」と丸山は回想している（「一

に与えられた専門分野に関わっていたと考えられる。丸山は、「初期マルクスの著作を読み、さらにマンハイムのソフィスティケートされた（正統マルクス主義者の用語でいえば修正主義的な）イデオロギー論に接していた私は、なにも先生のイメージにあるのが「存在拘束性の考え方」のすべてではあるまい、という不遜な思いから、学問的方法としては必ずしも先生の立場に従わずに来たことは、その後の諸論文に現われているとおりです」とも記している（「思想史の方法を模索して」一九七八年九月『集』⑩）。そしてまた前述したように、存在被拘束性と歴史主義の立場がもたらす危うさも認識していた。その南原の忠告に対して丸山は、「ともかくもこうして先生の教育者としての寛容さと、研究者としての厳しさ、

図6　長野県発哺にて（「発哺の女高師ヒュッテ前 1939.8 I「君、あの娘好きなんじゃないの」 M「うーん、さうでもないさ」」との自筆裏書き．丸山彰氏提供）

という両面に、私ははからずも入門早々にして接したのであります」と敬意を貫いている（「南原先生を師として」『集』⑩）。

＊当時の法学部の助手には身分の保証がなかったので、南原から「田舎に行って中学の先生になるつもりはあるか」とも言われたとの回想もある（「同人結成のころのこぼれ話」『集』⑮）。

＊＊のちの回想でも丸山は、助手になってまもなくのころ、南原から「「思想の存在拘束性」という考え方では思想史はダメだな」とはっきりいわれたのを覚えて居ります」といい、それは「私が学生の時に書いたさきの緑会論文で、カール・マンハイムの「存在拘束性」という用語を引用したのでありますが、先生はそうした根本の方法論について恐らくいわれたものであろうと思います」と述べている（「南原先生を師として」『集』⑩）。

丸山は助手の三年間の時代を「まったく充実していましたね」というとおり、助手仲間で食事に行ったり勉強会をしたりと楽しそうな様子を語っている。なかんずく末弘厳太郎の研究室に「居候」していた戒能通孝（かいのうみちたか）からは、ウエーバーの『経済と社会』を教わる機会にもなった。また史料編纂所にいた歴史学者の小西四郎を呼んで明治維新史、幕末維新史を学び、さらには土屋喬雄（たかお）『日本経済史概説』の勉強会を行ったりもしたという（『回顧談』（上）二三六、二一七～二一九、引用順）（「一哲学徒の苦難の道」『座談』⑤）。しかし、一方では専門の勉強に忙しくなり、また毎月『国家学会雑誌』の編集に追われるという日々でもあった（『回顧談』（上）二一九～二二二）。

東洋政治思想史講座の開設と津田左右吉の受難

日中戦争が始まった一九三七年の暮れ*には矢内原（やないはら）事件が、一九三九年一月には人民戦線事件が起こり、またいわゆる平賀粛学が行われた。平賀粛学とは、平賀譲東大総長のもとで、河合栄治郎の著書が発禁になったのを奇貨として、平賀、そして法学部長の田中耕太郎と経済学部長の舞出長五郎が、河合を犠牲にして土方成美ら革新派を一掃しようとした事件で、法学部教授会も、田中と、田中に原理原則から反対する南原、そして南原について革新派を擁護しようとする人びととの二つに分かれて

評伝 丸山眞男

その思想と生涯

黒川みどり

有志舎

最後になったが、『評伝 竹内好』（二〇二〇年、有志舎）の共著者であり一二年間私の同僚でもあった山田智氏は、私の伝えたいことを最もよく理解し、その上で率直に批判もしてくださるかけがえのない存在である。先にも述べたように丸山を理解し評価する人が歴史学にも部落問題の研究者にも皆無に近いなかにあって、私は氏に自分の考えをぶつけ氏の意見を聞かせていただくことで、ともかくもここまでたどり着くことができた。山田氏の存在があってこそ今の私の研究があると思っている。丸山が竹内好を〝親友〟と称したように、私にとっての山田氏にはその言葉がふさわしい。丸山彰氏の御宅で写真をスキャンしていただいたのに加えて、丸山の著作などの撮影も含めてすべて本書の写真の手筈を整えてくださったのは、ほかならぬ山田氏である。

ほかにも、個々にはお名前をあげないが、多くの方々のお世話になっている。以上の方々に心よりお礼を申し上げる。

二〇二三年九月二〇日

黒川みどり

著者紹介
黒川みどり（くろかわ　みどり）
早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学　博士（文学）
現在、静岡大学名誉教授
主要著書：『共同性の復権』（信山社、2000年）、『描かれた被差別部落』（岩波書店、2011年）、『差別の日本近現代史』（共著、岩波書店、2015年）、『創られた「人種」』（有志舎、2016年）、『評伝 竹内好』（共著、有志舎、2020年）、『被差別部落認識の歴史』（岩波現代文庫、2021年）、『増補　近代部落史』（平凡社ライブラリー、2023年）、『被差別部落に生まれて』（岩波書店、2023年）

評伝　丸山眞男――その思想と生涯――
2024年3月10日　第1刷発行
2024年6月20日　第2刷発行

著　者　黒川みどり
発行者　永滝　稔
発行所　有限会社　有　志　舎
〒166-0003　東京都杉並区高円寺南4-19-2
クラブハウスビル1階
電話　03(5929)7350　FAX　03(5929)7352
DTP　言海書房
装　幀　折原カズヒロ
印　刷　モリモト印刷株式会社
製　本　モリモト印刷株式会社

© Midori Kurokawa, 2024.　Printed in Japan.
ISBN978-4-908672-72-9